

いのち

毎年年末に、その年の世相を表す漢字が公募によって選ばれますが、昨年（平成18年）は「命」でした。ちなみに、一昨年は「愛」、その前年は「災」という漢字が選ばれています。

昨年は、悠仁親王のご誕生に日本中が祝福ムードに包まれた一方、いじめによる子供の自殺、飲酒運転による交通事故死、虐待による殺人事件など、痛ましい事件が多発し、「命」の重み、大切さを痛感した年だったと思います。

なかでも、いじめを受けた子供が、その苦しみに耐え切れず、自らの手で「命」を絶つという事件には、本当にやりきれない思いがいたします。

マザーテレサは、
「人間にとってもっとも悲惨なことは飢餓でも病気でもない。自分が誰からも見捨てられていると感じることです」
と語っていますが、いじめはまさに、その代表的なものだと思います。

誰でもいいんです、「苦しいだろうね、つらいだろうね、分かるよ、分かるよ」と、その子供の苦しみを分かちあける人が一人でもいれば、決して死を選ぶことはありません。

しかし、その悲痛な心の叫びが誰の心にも届かないと知った時、子供は「誰も分かってくれないなあ。つらいなあ、苦しいなあ」という深い絶望の中で、最後に選択するのが「もう生きていたくないなあ」という死への道なのです。
自らの手で命を絶たねばならなかった子供の無念さを思うと、胸のつまる思いがいたします。

思えば、私たちは人間の存在意義を有用性（役に立つかどうか）という観点だけで測ってきました。
そこでは、役に立つ者は必要な人材として大切にされますが、役に立たない者は無視され排除され、その存在さえも否定されてきたのです。
無視された者は、誰からも必要とされていないことを強く感じ、次第に生きる意欲を失くしていくのです。

ここ数年の統計を見ますと、日本の自殺者は毎年三万二千人を超えており、世界でも有数の自殺多発国です。これは交通事故で亡くなる人の実に4倍にもなり、単純に計算しただけでも、毎日九十人近くの方が自ら命を絶っていることとなります。

今、日本は、かつてないほど豊かで快適で便利な社会を実現しましたが、その一方で、こうした自殺者が後を絶たない、生きる希望を見出せないような社会をも創ってしまったのです。

その最大の原因は何かと言えば、それは私たちが有用価値（どのくらい役に立つか）という「ものさし」で人間を色分けしてきたということにあると思います。

仏教は、そんな人間社会に向かって、「命はものさしでは測れません。そこに存在しているだけで等しく尊いのです」と、教えるものです。

仏伝には、お釈迦さまが誕生されてすぐに「天上天下唯我独尊」と唱えたということが記されています。

言葉の意味は、「この世において、唯我独り尊い」ということですが、これは「自分（釈迦）一人がこの世の中で尊いんだ」ということではなく、私たち一人一人が、誰に代わることもないかけがえのない尊いのちをいただいているという事を教えているのです。

たとえば私一人をとりあげてみましても、この私という人間は、人類の歴史始まって以来、今ここにしか生きていません。また、これから人類の歴史が何年続いたとしても、この私という人間は二度と誕生しないのです。また現在、地球上に六十億人以上の人が住んでいますが、何人たりとも私に代わることは出来ません。

まさに私たち一人一人は時間的にも空間的にも絶対的存在です。つまり誰もが「唯我独尊」なのです。

『阿弥陀経』に浄土の姿を「青い色には青い光、黄色には黄色い光、赤い色には赤い光、白い色には白い光」と示してあります。

これは「どの色に価値があるかと比べるのではなく、それぞれが自分の持っている色を輝かすことが出来れば、それが最も尊いことですよ」と私たちに教えているのです。

十人いれば十人十色、百人いれば百人百色、私たちはそれぞれ「自分色」を持っています。その自分色を照らしあうことによって初めてこの世界が光り輝いてくるのです。無駄な色、役に立たない色など一つもありません。

昨年、全国紙に公共広告機構から次のような広告文が掲載されました。

命は大切だ
命を大切に
そんなこと
何千回何万回言われるより
「あなたが大切だ」
誰かがそう言ってくれたら
それだけで
生きていける

まことに、その通りだと思います。

「私のことを大切に思ってくれてる人がいる」・・・これが生きる大きな力になるのです。

お念仏（南無阿弥陀仏）は阿弥陀さまの呼び声です。

「あなたが大切です。どんなことがあってもあなたを護り通します。決してあなたを見捨てません」と呼んで下さっています。

その阿弥陀さまの大悲のお心をいただく時、私たちは「いのち」のありったけを出し切って生きられるのです。

九条武子夫人（本願寺21世明如上人の二女）は、そのお念仏の味わいを次のように歌にされています。

百人（ももたり）の 我にそしりの 火は降るも
ひとりの人の 涙にぞ足る

歌の趣旨は、「誰からも見放されても、私には、ともに涙して下さる方がいらっしゃいます。だから、いかなる苦難に出遭おうとも、私はそれを乗り越えていくことができます」というものです。

平成19年2月 「光明寺だより49号」より